

無アクセント方言のイントネーション

前川 喜久雄
(国立国語研究所)

要旨 福井・熊本の無アクセント方言には統語・談話構造を反映するイントネーション制御が存在する。両方言のイントネーション形状は基本となるイントネーション成分に局所的な境界音調がくわわったものとして記述可能である。福井方言には発話全体に一樣に作用するピッチの低下機構である declination が存在し、イントネーション句境界は LHL 音調によって表示される。この句境界音調が発話全体のピッチ低下に貢献するかどうかには明確な結論をえることができなかった。熊本方言には declination がみとめられず、基本イントネーション成分はいちじるしい上昇をしめす。熊本の句境界音調 HL は発話全体のピッチ低下には貢献していないと判断された。

INTONATIONAL CHARACTERISTICS OF JAPANESE
ACCENTLESS DIALECTS : A PILOT STUDY

Kikuo MAEKAWA

National Language Research Institute; Tokyo

Abstract Intonational characteristics of two Japanese accentless dialects were examined. Both Fukui and Kumamoto are known to have no lexically specified tone or accent. While accent is the main determinant of intonation in accent dialect, intonation of accentless dialects is determined mostly by phrasal, sentential and discourse factors. Fukui intonation has the component of declination. Contribution of Fukui phrase boundary LHL tones to the lowering of overall pitch range was examined, but no clear result could be obtained. The basic component of Kumamoto intonation is a continuous upward movement, starting from the beginning of a phrase and being reset by the existence of phrase boundary HL tones. The HL boundary tones of Kumamoto make no contribution to the lowering of overall pitch range.

2. 3 発話者

山形県山形市（佐藤和之氏 35歳 男性）
茨城県日立市（川嶋秀之氏 34歳 男性）
福井県福井市（新田哲夫氏 33歳 男性）
熊本県鹿本郡菊鹿町（平野明子氏 19歳 女性）

これらの方々に調査票に各項目の方言訳を記入していただいたうえで、5回繰り返しの発話を録音したカセットテープを返送していただいた。録音状態が比較的良好的でイントネーション形状にも特徴のいちじりしかかった福井方言について全資料のF0抽出を終了しており、茨城方言の分析を現在すすめている。録音資料のF0抽出には東大医学部音声言語医学研究施設の今川博・桐谷滋両氏の開発になる『音声録聞見』（Sound Master版）を利用していただいた。

3 観察

3. 1 疑問詞疑問文と単純疑問文

【福井】 両者はことなるイントネーション形状をとる。疑問詞疑問文（Wh）では疑問詞と述語のあいだにイントネーション句境界がみとめられないか非常によわいが、単純疑問文（非Wh）では述語のまえにあきらかな句境界が存在する。この差は疑問文が従属文となった場合にも保持される。

【熊本】 やはり両者は別個のイントネーション形状をとる。イントネーション形状自体は福井方言と異質であるが、イントネーション句境界に関する特徴は共通している。従属文中でも同様。

【茨城】 ここでもやはりイントネーション形状が相違する。ただし、福井・熊本におけるような句境界の存在はかならずしも明確でない。両者を弁別するのは発話末尾の形状であり、Whでは末尾に上昇が、非Whでは末尾から2番目のモーラから下降が生じる。（末尾から3番目のモーラに下降契機がある。）やはり従属文中でもこの差が保持される。

3. 2 枝分れ構造

【福井】 左枝分れだけからなる「青い屋根の家がみえる」（の方言訳。以下同様。）は名詞句全体が平板なピッチで発音される。名詞句中に右枝分れ構造をふくむ「青い大きな家がみえる」では／アオイ／がひとつのイントネーション句として独立する。

【熊本】 やはり左枝分れ名詞句中にはイントネーション句境界がなく、右枝分れをふくむ名詞句には句境界が生じる。

【茨城】 福井・熊本と同一。

3. 3 無題文と有題文

【福井】 無題文「次郎が読むと眠たくなる」と有題文「次郎は飲むと眠たくなる」を比較すると、題目／ジローワ／がイントネーション形状のうえで独立している点に差がみとめられる。【熊本】【茨城】も同様。この差をうみだす

のは題目の有無そのものではなく、統語構造の差異であるとおもわれる。以下の構造を比較。

[[[次郎が][読むと]] [眠たくなる]]

[[次郎は] [[飲むと] [眠たくなる]]]

▲
(左/右枝分れ境界)

4 イントネーション形状の方言による差異

4. 1 福井方言

★平坦な基本イントネーション成分にイントネーション句境界をしめず局所的な上昇/下降パターン(LHL音調)がくわわる。

★基本成分には時間の関数としてのゆるやかな低下(declination)がみとめられる。

★LHL音調の左右で declination よりもおおきなピッチ低下が観察されることもあるが、その効果は東京方言など有アクセント方言における downstep ないし catathesis に比較するとはるかにちいさい。

4. 2 熊本方言

★基本イントネーション成分は急激な上昇をしめず。イントネーション句境界は局所的なピッチの下降(HL音調)によってしめされる。

★基本成分には ---当然ながら--- declination がみとめられない。

★HL音調は周波数軸上での基本成分の上昇開始点をリセットするだけであり、それ以上積極的に発話全体の低下に寄与してはいない。

4. 3 茨城方言

この方言に関してはまだ分析がすすんでいない。

★基本成分は平坦である。declination の存否は不明。イントネーション句境界は下降(HL音調)によってしめされる。

★HL音調の性質は熊本とちがっており、句境界末尾から3モーラ目にHがリンクされる。

5 無アクセント方言イントネーションの韻律構造について

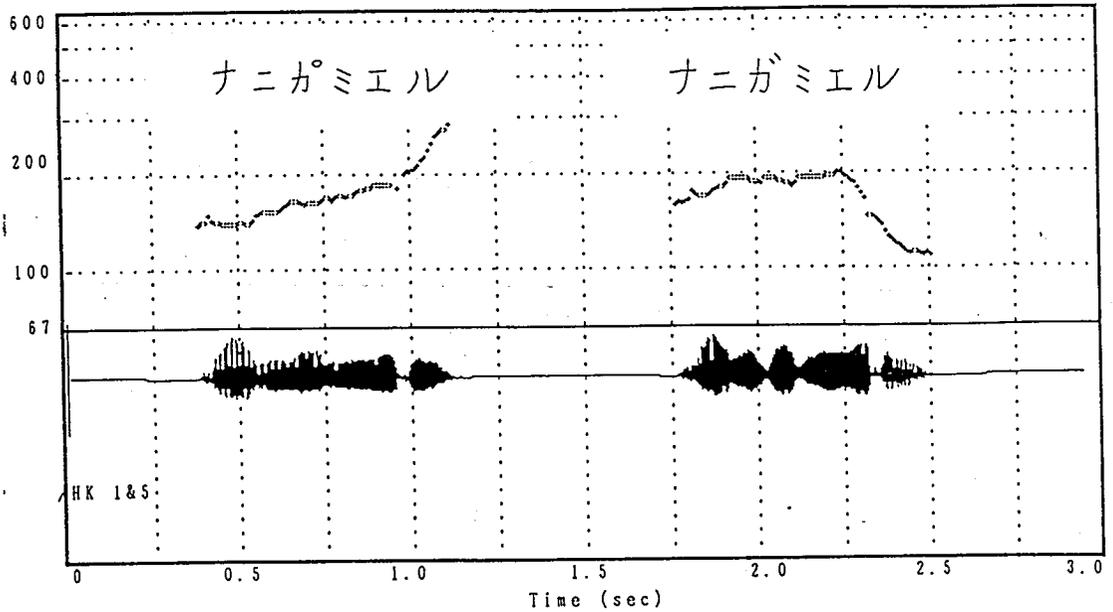
★福井、熊本、茨城、どの無アクセント方言においても、アクセント句を認定する必要はない。(これは当然。)

★イントネーション句境界を表示するためのノードは必要であるが、このノードに関連して downstep like な句レベルでのピッチ低下機構がはたらくことはないようである。この種の低下機構の欠如が、無アクセント方言に関して従来くりかえし指摘されてきた「まったいら」「尻あがり」などの主観的印象をもたらすのではないかと推測される。

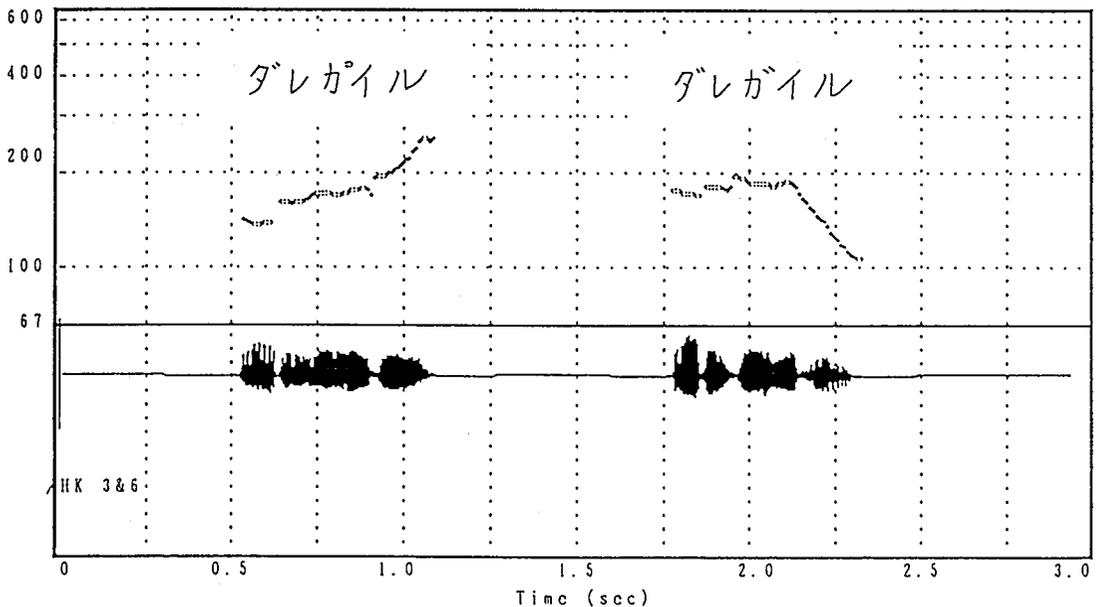
【以下は茨城方言のピッチデータ】

茨城方言のイントネーション

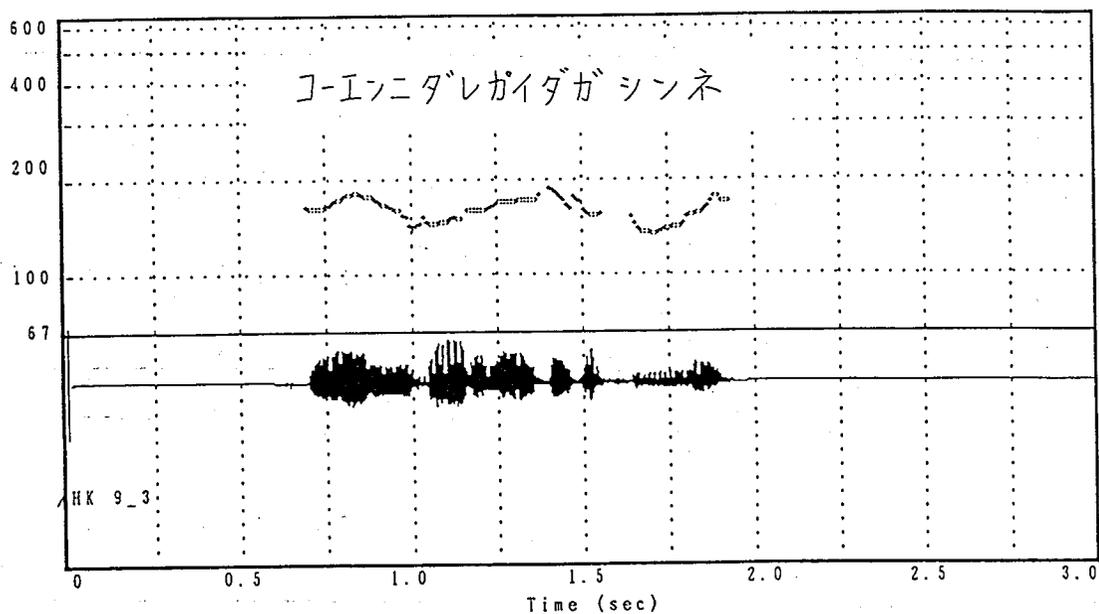
【以下の図で周波数軸は対数。イントネーション曲線上部に方言訳を記入。】



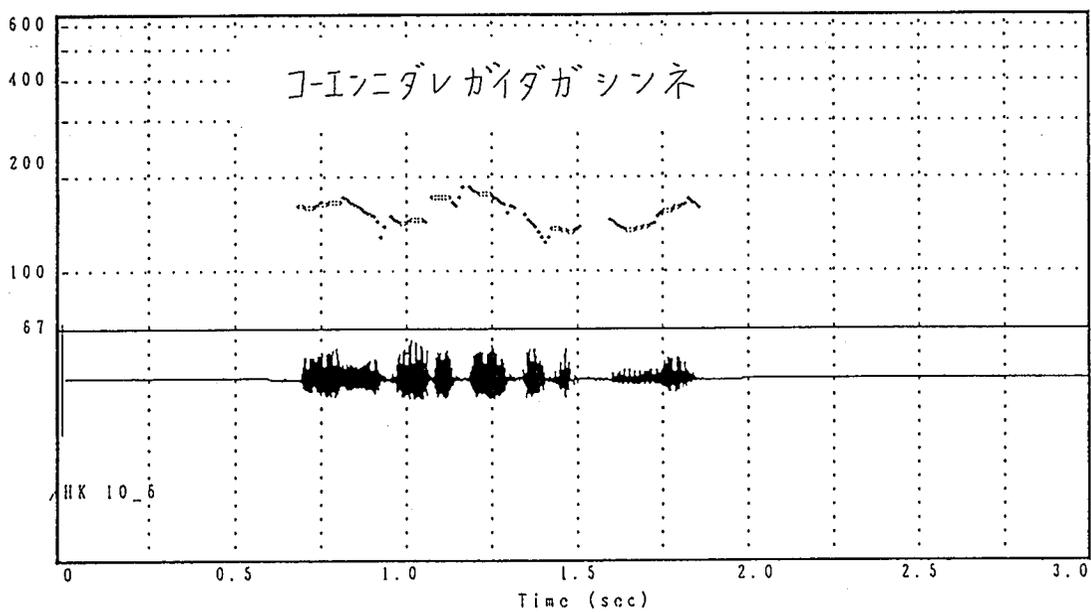
茨城方言に翻訳した疑問詞疑問文「何がみえる？」（左）と単純疑問文「何かみえる？」（右）。



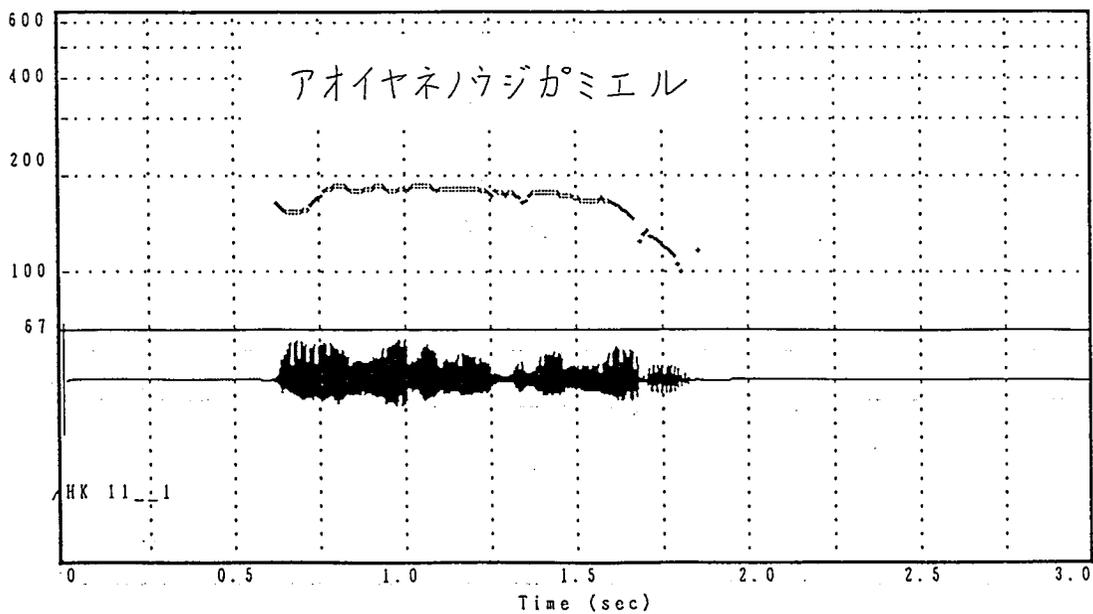
茨城方言に翻訳した疑問詞疑問文「誰がいる？」（左）と単純疑問文「誰がいる？」（右）。



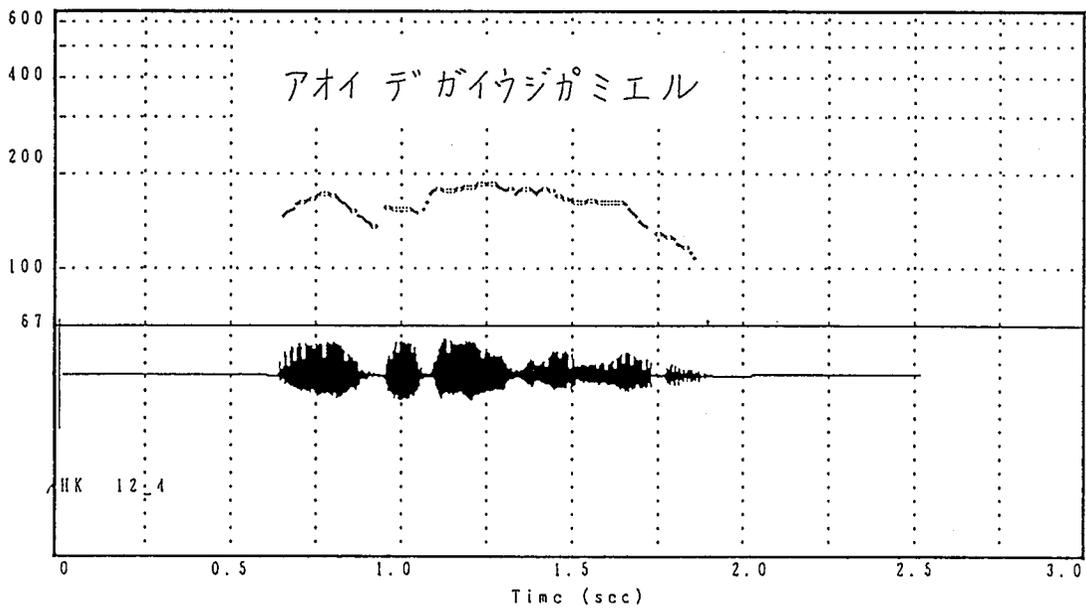
茨城方言に翻訳した埋め込み疑問詞疑問文「公園に誰がいたかしりません」



茨城方言に翻訳した埋め込み単純疑問文「公園に誰がいたかしりません」



茨城方言に翻訳した「青い屋根の家がみえる」。／アオイヤネノウジ／の部分は左枝分れ構造のみからなる。



茨城方言に翻訳した「青い大きな家がみえる」。／アオイデガイウジ／の部分に左枝分れ構造と右枝分れ構造の境界をふくむ。